

であり、弓道場もあったので、後の第一、第二地区の発展の基盤ができていた。しかし、西部は地域自体がまだ形成途中だったため、昭和45(1970)年頃までは第三地区はその面積が広いにもかかわらず、他の二地区と変わらない規模だった。しかしその後の地域人口の増加や婦人教室の開催により弓道人口が増え、今では、他の二地区の二倍に達している。

人口のデータを見てみると、平成5年で頂点に達し、その後減少し続けていることがわかる。こ

れが現在の連盟の抱えている問題で、なんとか増加傾向にもっていかうと対策が練られている。現段階でもっとも効果的と考えられているのが、学生が社会に出るときの弓道離れを食い止めることである。そのためには、今のように学生弓道と一般弓道が分断されてはならない。連盟が学生弓道を完全に吸収することによって、本当の意味で弓道界の全国統一が達成されるのであり、弓道人口の減少にも歯止めをかけることができるのである。

鉄道、道路、大規模小売店の進出等による商店街への影響

三原直子

私にとって商店街の最大の魅力は、その町ごとの雰囲気を感じられるところだからである。駅から近く同じような位置にある二つの商店街があり、一方は人通りも多く栄えているのに対し、もう一方は人通りも少なく寂しい感じである。この現状の原因となったものをつきとめ、商店街の可能性を考えたいというのが本論文の研究目的である。

商店街の定義は、平井をはじめ数多くの方が定義している。また商店街の最近の研究として田中が「商店街を1つの企業としてとらえ、総合的に問題解決をはかろうとする試みは、時代の変化の中で大きな曲がり角を向かえたのである。そこには、競争の激化によって、自立的な個別点を中心に派生的な商店街像を追求する必要性がますます高くなっている。」と指摘している。

商業環境は戦後の物不足に時代から高度経済成長期につくれば売れる時代に移り変わり、さらにオイルショックあたりを境にも余りの時代に入ってしまった。現代は商品・機能に企業格差がなく何らかの付加価値をつけないと売れない時代になっている。

商店街の一般的現状は、「停滞・衰退している」商店街が全体の94.7%にのぼり一般的に厳しい状況にある。

笹塚地域は関東大震災後急速に発展し、それま

で農村の町だったのが一転して住宅地に変わった。東京大空襲で大きな被害を受け二つの商店街も受けたが復興は早く昭和30年前半に商店会を足発、昭和40年代はじめに復興組合となっている。経済の発展とともに商店街も発展するが昭和40年代後半からの笹塚地区へのスーパーの進出は、二商店街に大きな影響を与えた。アンケート調査によると、一番大きな影響を受けたものはショッピングセンター21及び伊勢丹ストアの進出であった。観音通り商店街は位置的にショッピングセンター21の目の前であり、客足の影響は非常に大きかった。また、笹塚駅高架化工事に伴う出口の変化は、観音通り商店街により大きな打撃を与えている。十号通り商店街に関していえば、スーパーの進出により閑古鳥の鳴く有り様となったこの商店街では、若者、つとめ人を呼び戻すなど積極的な活動を行うことで商店街自体の力を増大させ、理事会・青年会の幅広い活動のもと今の活気ある商店街を保っているという。

大規模小売店の進出の影響の多大さと、駅の構造の変化に伴う人の流れの変化、そして商店街の問題への取り組みの違いがこの二つの商店街の人通りの違いへとつながったと考えられる。これからの商店街の取り組みでどう商店街が変化していくかこれからみていきたい。